九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

亀井昭陽・頼山陽の福岡に於ける再会 : 出会いの場所論(前編)

荒木, 正見
梅光女学院大学 : 助教授

https://hdl.handle.net/2324/1654415

出版情報：地域文化研究 : 地域文化研究所紀要. 9, pp.107-116, 1994-02-28. 梅光女学院大学地域文化研究所
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

梅光女学院大学
地域文化研究所紀要抜刷
第九号　一九九四年二月二十八日

亀井昭陽・頼山陽の福岡に於ける再会

――出会いの場所論（前篇）――

荒木正見

亀井昭陽・頼山陽の福岡に於ける再会

―出会いの場所論（前篇）―

荒木正見

序

小論は、文政元年（一八一八）の福岡における、亀井昭陽（一七七三―一八三六）と頼山陽（一七八〇―一八三二）との出会い状況の本質的意味を、場所論として考察する試みの一端である。

場所論とは「場所とはなにか」を考察するすべての学を意味するが、それが最も本質的に問われるとき存在そのものの学になる。存在の基底そのものを最も普遍的な場所と考えるならば、場所とは絶対的であり一元的な神そのものである、という考え方や、物質的な宇宙であるといった考え方が生じる。いま、「出会い」という事実を場所論として考察しようとするとき、考察の具体的場面では、このいずれの考え方をも活用せざるを得ないことに気付く。例えば、神のもとにおける結婚という出会いの儀式は、存在を司る神を前提としたものであろうし、衝突事故という出会いは、一般的には物質的対象の双方が物質的因果によって引き起こしたと説明されるであろう。

しかし、「袖振りあうも他生の縁」とも言われるように、出会いを前世よりの因縁とする考え方も存在する。この考え方の特徴は、出会いの原因を自覚していないという点にある。自覚していないながら何らかの因果が存在する。このことは、存在の根底に触れる問題である。西田幾多郎は、「場所」こそが存在であるとして、この問題を解決しようとした。

述語論理の典型とされる西田幾多郎の場所論は、主語述語の関係から存在とは場所であるという結論を得る。まず、存在とは最も普遍的なものであるから、絶対的な主語を想定しよう。筆者なりに例を挙げれば、「神」「絶対者」などが浮かぶが、西田幾多郎によればそのいずれもが主語として立てられると、いかに絶対的な意味を与えようと、言語化する以上意識的限定を蒙り、なんらかの特殊性を背負うことになる。また、言語化しないと主語にはならない。これに対して、述語は立てられた特定の主語に対して適合する普遍的な意味を持つ言葉を当てはめている。従って述語は本来は普遍的な性格を持つ。さらに、最も普遍的な述語を筆者なりに挙げれば「ある」である。しかしこの「ある」は、最後に言語であるという特殊な限定を有する。したがってもはや、その「ある」という言語を消し去らなければならないが、指示する言葉だけは残さなければならない。そこで、「ある」を写真のネガのように指し示す言葉として「ありか」すなわち「場所」と呼ぶ。以上は、西田幾多郎の「場所」（大

正一五年(1)を筆者なりに解釈したものであるが、その論文には同時に「場所の自己限定」という重要な概念が示される。それは、存在そのものである場所自身が自らを限定することで、個々の存在者が成立しているのであり、また、それら個々の存在者こそが場所そのものでもあるというのである。これは、小論のような具体的な問題を考えるのに重要な手掛かりとなる。すなわち、個々の存在者やそれらの事象は、一見ばらばらの偶然性によって生じているように見えるが、本来は存在全体によって構成されているのであり、場合によっては自覚されない原因や事態が深く関わっている可能性もあるということを意味するのである。勿論、存在、場所は特定の存在者にとっては背景以上のなにものでもなく、我々が必然と呼ぶほどの現実的必然性を読み取ることは困難である。しかし、存在者の述語的状況の中に必然的原因が読み取り難い場合、むしろ、背景としての場所の総合的事態を構成し、個々の状況との手掛かりを得ることは可能であると言える。そして、この場合、「場所の自己限定」の個々の存在者の側からの規定が有効に活かされる。すなわち、手掛かりは、場所の総合的構成の側からだけではなく、個々の存在者が場所の全体をも性格付けようとする事態にもあるということである。勿論、これも当事者や考察者、また、歴史的事実において、必ずしも自覚的であるとは限らない。むしろ、以下に行われるような考察の全体から浸出してくるという性格のものである。

さて、頼山陽が福岡に滞在したのは文政元年初夏であり、しばしば亀井昭陽を訪ねている。彼らは先立つ文化四年（一八〇七）に、山陽の父、頼春水の広島宅で会っている。それから、一一年後、福岡での再会は、両者の境遇をそれぞれに変えていた。いま、福岡という場所の視点から見ようとするとき、変化の考察の軸は昭陽に置かなければならないが、昭陽個人の境遇の変化とともに、昭陽自身もはっきりとは自覚出来なかった、そして、当時の誰もがはっきりとは自覚できなかった福岡という場所の総合的な意味があったのではないか。このような問題意識に基づいて、両者の福岡での出会いの状況と、その状況の背景としての、一八一八年を中心とした総合的な福岡という場所の意味とを考察する。

なお、紙数の関係上、前後篇に分けて掲載する為、小論ではまず両者の出会いについてのみ述べることにする。

一、亀井昭陽と頼山陽との人生の出会い

頼山陽が福岡を訪れたのは文政元年（一八一八）四月二六日である。宿舎とした松永子登宅には五月一七日まで留まり、佐賀を経て長崎へと出立していった。福岡に留まる間、山陽は亀井昭陽を親しく訪ねている。実は、彼らはかって山陽の父、頼春水の広島宅で会っている。それは、文化四年（一八〇七）三月二十二日、昭陽満三三歳、山陽満二六歳であった。再会を喜んで山陽は「芸城分手夢空尋鶏黍今朝喜盃箸」（「亀井元鳳招飲賦贈」『山陽詩鈔　巻之三』(2)）と詩う。しかし、一一年後の福岡での再会は、両者の境遇がそれぞれに変化したことを痛感せしめるものであった。とりわけ、昭陽にとってはそれは歴然としていた。まず、昭陽の個人的状況の変化を辿ってみる。

天明四年（一七八四）、福岡藩は二つの藩校を設立した。それまでの藩士育成の主流であった朱子学の流れを汲む竹田定良を主軸とする東学問所（東学・修猷館）と、徂徠学の流れを汲む医師でもあ

る民間学者、亀井南冥（一七四三―一八一四）を祭酒として創らせた西学問所（西学・甘棠館）である。満一〇歳の昭陽（昱太郎）は、父南冥に対する異例の抜擢に参画し、翌天明五年（一七八五）には秋月藩主黒田長舒（朝陽公）に拝謁、それからは父南冥が毎月出講し、やがて昭陽自身が父に替わることになる。昭陽と秋月藩主黒田長舒との親しい関わりは、これから文化四年（一八〇七）一〇月一六日に長舒が没するまで続くことになる。

昭陽の学業も進捗し、寛政二年（一七九〇）には、六、七〇人の塾生の長となっている。また、翌、寛政三年（一七九一）には、三月から六月にかけて山陽地方に遊学の旅をし、特に、徳山藩の藩黌鳴鳳館の島田藍泉宅には十数日滞在し、後に父南冥が藍泉に、『児昱文学大進、知レ有レ得二周南数日之遊一、賦レ之寄二謝藍川役公一』(3)という感謝を込めた詩を贈るほどに目覚ましい進歩を遂げている。

そして、その年に書き上げた『成国治要』三巻は、後には経学の数々の業績をあげたこともあって、昭陽にとっては生涯を通して経世済民の学の名著とされる。

しかし、寛政四年（一七九二）七月一一日に、亀井南冥は満四八歳にして突如罷免（廃黜）され、終身禁足を命じられた。その根本的理由は、すべての研究者が指摘するように寛政二年（一七九〇）幕府が発した寛政異学の禁にあることは否めないであろう。それに発した学派対立に加えて、南冥の奔放で妥協を許さない性格や、「岡県白島碑」や「太宰府旧址碑文」の撰文に不都合な点があったなどとされるものや(4)、それらのことと実弟の崇福寺住持曇栄和尚が末寺芦屋観音寺住持の不行跡をとがめたところ逆に讒訴されるという事件に対して、良き理解者であった藩老久野外記宛てにしたためた、家老等の藩の要職や藩政そのものに激烈な批判を述べた書簡の内容が藩中に洩れたとされるものや(5)、高山彦九郎などとの交際に関して情報漏洩の恐れから(6)、さらには、寛政二年（一七九〇）一一月一一日、南冥を背後から支えてきた藩老久野外記の死去による藩内の勢力バランスの変動、幕府との政治的関係など、さまざまに語られるが、いずれにせよ、冒頭の「寛政異学の禁」に深い関わりがあると言えよう。

『修猷館二百年史』によれば、当初の東西両藩校は竹田定良（修猷館）と亀井南冥（甘棠館）の両者が連絡をとり合って相互協力のもとに発足したのであるし、庶民の子弟は甘棠館のみに入学を許可されたが、藩士子弟の相互の行き来も自由であった。また、教官の交流も行われた(7)。もちろんそこには『福岡県史』所収の井上忠「亀井南冥と竹田定良―藩校成立前後における―」で書簡を手掛かりに指摘されるように異なる学風としての対立も存在しようが(8)、本来、朱子学を中心とした修猷館と、徂徠学を中心とした甘棠館との自由競争を旨として設立された筈であった。しかし、その自由競争に、幕府の朱子学最優先の原理が投影されれば、その結果は目に見えている。いかなる原因が直接に関係するにせよ、甘棠館の運命は尽きる方向に向かうしかない。昭陽は満一八歳にして家督を相続し甘棠館訓導となるが、江上苓洲が祭酒となった甘棠館は学生数も激減する。

それでも、昭陽の名声を慕って若き廣瀬淡窓が入門する（寛政九―一一年）などということもあったが、丁度その頃、寛政一〇年（一七九八）二月朔日、唐人町の出火に甘棠館、亀井家のすべてが類焼、そのまま藩は六月に、甘棠館の廃校を決定、教員はすべて平士とさ

れることになる。昭陽も城代組平士として藩の一役人となったのである。

翌年同じ場所に再建した自宅が再び類焼したことを機に、享和元年（一八〇一）五月に昭陽は、百道に転居、私塾を開くとともに、父南冥には草香江亭という庵を設け、しばらくの小康を得ることになる。この時期、昭陽は役人として勤務しつつ私塾で教え、著作にも勤しむが、福岡藩ではもはや過去の人になりつつあった。しかし、秋月藩主黒田長舒とは、間に立つ秋月藩藩校稽古館の祭酒を勤めた原古処の尽力もあって継続して親しく交際していた。文化三年（一八〇六）黒田長舒の後援で、すでに寛政五年（一七九三）に完成していた南冥の『論語語由』がようやく江戸で開板されることとなり、昭陽は秋月藩主の江戸参勤に同行する。そして、文化四年（一八〇七）、昭陽と頼山陽が広島で会ったのは、その帰途のことであった。

しかし、その文化四年（一八〇七）一〇月、昭陽が江戸から帰ってわずか半年後に、黒田長舒は逝去する。強力な後眉を失った昭陽の立場は、文化六－七年（一八〇九－一〇）にわたって勤務した烽山輪番に象徴されている。文字通り、長崎における外国船の動静を烽火で各地に伝えるという目的の山上の勤務であるが、その個人的記録が『烽山日記』である。しかしもちろん荒木見悟『叢書・日本の思想家　亀井南冥・亀井昭陽』にも指摘されるように、それは真剣な意図で記された文学作品でもある(9)。同書の指摘によるように、時には後で削除しなければならないくらいに藩の冷遇や政策を批判してもいるが、また他方で、下界の雑踏を離れた快感をも記している(10)。しかし、そのわずかの安寧でさえも連続する不幸によって消し去られていく。文化六年（一八〇九）、島田藍泉が死去したのに続いて、文化九年（一八一二）、末弟の大年が死去、そして、文化一一年（一八一四）三月二日、父亀井南冥が満七〇歳で焼死する。廣瀬淡窓が「終ニ狂疾ヲ發セラレタリ」と記し「火ノオコリシ所以、知リカタシ。自ラ火ヲ放タレシヤ。自然ニ起リシヤ。自ラ火ニ投セラレシヤ。将タ出テントシテ、及ハサリシヤ。」（『懐舊樓筆記』巻一五(11)）と著すような悲惨な死であった。

しかしこの境遇においても、昭陽は後に『空石日記』に示されるような著述の努力を続ける。この時期の最大の著作は後述する『蒙史』六巻であるが、ひとまず脱稿したのが文化一一年（一八一四）、南冥死去の年であり、完成をみたのが頼山陽と再会した文政元年（一八一八）である。

その後、晩年に向かって昭陽は経学の書を数多く著述する。しかし、先の廣瀬淡窓が入塾する際には一時秋月の内山家の養子になったこととして入塾した様に、南冥罷免以降、亀井塾が他国者の入塾を禁じられていたこともあり、一部の研究者に高く評価される以外は、徐々に孤高の学者と化していった。

私生活でも、妻の実家が経済的には豊かであり、内助の功を受けることができたことや、長女少栞が文才を発揮しはじめたことを除いては、不幸の多い晩年であった。文政五年（一八二二）には、三男修三郎を満四歳で失う（『傷逝録』三冊附録一冊）。また、文政八年（一八二五）には、次弟大壮（雲来・満五〇歳）と長男義一郎（満一九歳）を数日の間に失う。知己としては、原古処が文政一〇年（一八二七）に逝去している。そして、頼山陽が満五一歳で没したのが天保三年（一八三二）九月二三日であった。その間、経学の名著を次々に完成するのであるが、とりわけ、文政一二年（一八二

九）に家督を次男鉄次郎に譲ってからは、著作に専念することになる。そして、天保七年（一八三六）五月一七日、昭陽は満六二歳の生涯を閉じる。

このように、昭陽にとっての文政元年の頼山陽との再会は、一時の社会的栄光が消え去った時期であり、また、学問的にも、以降の経学中心の著述へと傾く直前であった。

では、この当時、頼山陽はいかなる個人的状況にあったのか。

頼山陽（久太郎）は安永九年（一七八〇）一二月二七日、大阪で家塾を営む頼春水（彌太郎）の長男として生まれる。亀井昭陽より七歳若いことになる。翌、天明元年（一七八一）には、父春水の郷里、安芸国竹原（広島県竹原市）で祖父亨翁（又十郎）と顔を合わせたりもするが、その年の一二月に春水が、広島藩の藩儒として勤務することとなり、満二歳の山陽は、天明二年（一七八二）には広島に移る。ところが、翌、天明三年（一七八三）八月、春水は江戸詰となり、満二歳の山陽は母とともに大阪の外祖父飯岡義齋に預けられることになる。春水はこれから、亨和三年（一八〇三）に江戸から帰るまでしばしば江戸に滞在し、藩主の世子浅野齋賢（なりかた）の輔導を勤めたり、天明七年（一七八七）幕府老中となった松平定信が発した寛政二年（一七九〇）の「異学の禁」に対して、広島藩藩校での朱子学優先への改革の経験をもとに助言したりもしている。頼山陽が再び広島の屋敷に戻ったのは天明五年（一七八五）満四歳の時であるが、これから、父春水とは触れ合うことの少ない幼少年期が続く。

しかし、竹原に私塾を開く叔父の頼春風や、天明五年（一七八五）に広島藩藩儒となった叔父の頼杏坪などにも見守られながら、天才少年とみなされる学問的成長を遂げる。寛政三年（一七九一）に、父春水は江戸より書状で「襄（のぼる）」という名を送っている。また、寛政九年（一七九七）四月には、叔父杏坪が江戸上番となったのに同行し、昌平黌に入学、尾藤二洲、古賀精里、柴野栗山等に指導を受け翌年杏坪とともに帰藩している。安藤英男『頼山陽傳』によれば、この一年間に江戸の至る所でその才気を発したという(12)。

ところがこのころより、山陽はひとつの苦悩を背負うことになる。それは、国史執筆の意図であった。そして、その意図のもとで山陽は京都に上り研鑽を深めたいと意志した。しかし、当時国史の代表は水戸光圀が編纂させた『大日本史』であるが、それさえ出版できないという為政者の制限があった。まして、すでに才名のある頼山陽が、朝廷の膝元に赴くことは危険なことであった。春水は山陽を慰める為か、船遊びに誘ったり、寛政一一年（一七九九）には結婚させてもいるが、山陽は夜遊びに耽り、結局、寛政一二年（一八〇〇）九月五日、満一九歳の山陽は竹原への弔問の途中、松子山で出奔してしまう。九月二八日に春水門人である京都の福井新九郎宅で発見され、一一月三日には春風とともに帰邸し幽室することになる。脱藩者は発見され次第、追い討ちの刑として斬られることが常識であったから、頼家としては一大事であった。しかし、頼春水からの、山陽は狂気であったという届けや、かつて春水が輔導を勤めたこともある藩主浅野齋賢（なりかた）の英断などもあり、ことは穏便に済まされ、『頼山陽傳』によれば、捜索費用として三十両の手元金まで賜ったという(13)。寛政一二年（一八〇〇）九月二一日に幕府から昌平黌の教授を命じられたばかりの春水としては、まさに危機一髪の事態であったが、春水は山陽を廃嫡し監禁を言い渡し、春風の長男景譲

（權二郎）を仮養子に立てて乗り切る。また、山陽の最初の妻、淳子も離縁するが、その直後に生まれた余一（聿庵）は、やがて春水の後を継ぐ。

亨和三年（一八〇三）五月に春水は長い江戸での勤務を終えて帰藩し、その年の一二月、満二三歳を目前にした頼山陽は幽室を解かれる。そして、文化二年（一八〇五）五月には門外自由を公に認められすぐに広島藩学問所の助教に挙げられている。このころ、『日本外史』の著述はかなりはかどっていた。右にも述べたように、亀井昭陽が訪れたのが文化四年（一八〇七）三月二二日のことであるが、この時に披露したともいわれ、また、昭陽が『蒙史』を書くに至ったきっかけがこの日の会見にあるとも言われる。いずれにせよ、ふたりの会話に国史が上ったことは当然であろう。

それからの山陽は、文化六年（一八〇九）から文化八年（一八一一）にかけて福山・神辺の菅茶山の廉塾の都講を経て、文化八年閏二月、京都に入り、天保三年（一八三二）九月二三日、満五一歳の死に至るまで京都での生活を送ることになる。

中村真一郎『頼山陽とその時代』でも特に長い章を設けて論じられるように(14)、また、『頼山陽傳』でも触れられるように(15)、派手な行動によって敵対者や批判者も数多く存在するとはいえ、その派手さや才気ゆえに、また、その後爆発的に読まれることになる『日本外史』の著者として次第に文人として時の寵児となっていった頼山陽は心の赴くままに、また、請われるままに日本中を旅した。文化一三年（一八一六）に父春水が逝去し、その三回忌の法要の為に広島に西下した山陽は、そのまま文政元年（一八一八）三月六日に九州へと旅立った。これが、亀井昭陽との再会の契機である。

さて、亀井昭陽と再会した頼山陽のこの時期は、『日本外史』の最後の完成に向かって改筆を繰り返していた時期でもある。『日本外史』を、すでに文化九年（一八一二）に隠居して楽翁と称していた松平定信に清書献上したのが文政一〇年（一八二七）であり、翌文政一一年正月に楽翁（定信）が題辞を付けたこともあって、その後『日本外史』は津々浦々に読まれ、勤皇の志士の胸を熱くするのである。

従ってこの時期は、偉大な父の死という人生の節目を超えて、頼山陽にとって時代の寵児となる予感に満ちた時期だと言える。しかし勿論、右にも述べたように、また、後に述べるように、彼の敵対者を生むだけの未熟さの影を引きずっている頃でもあった。

かくして、亀井昭陽の人生と頼山陽の人生は、文政元年（一八一八）の福岡で交錯した。本節での両者の比較だけでも、頼山陽にとっての広島という場所が比較的穏和に存在しているのに比して、逆に亀井昭陽にとっての福岡という場所が厳格に存在していることが推測されるが、それでは、「場所」としての福岡で、ふたりはどのように再会したのであろうか。

二、文政元年の福岡での出会い

文政元年（一八一八）初夏における亀井昭陽と頼山陽の出会いに、福岡という場所がどのように働いたのか。例えば、中村真一郎『頼山陽とその時代』によると、福岡藩の儒員たちによって頼山陽に対する放逐運動が起こったので山陽は出立を余儀なくされたと記されるが(16)、それが事実であれば尚更、また、事実ではなくても二人の出会いが、福岡という場所にとってそれほど歓迎すべきことでは

なかったということは推測される。

また、『昭陽先生文集初編』には、「賀松子登加俸序」の中に頼山陽（子成）を泊めてもてなした松永子登を賛えた一節がある。そこでは次のように訳されている(17)。

「日頼子成之西遊人以其卓弛不講道学灼黥視之」

―先日、頼子成が西遊し、人々は彼が怠惰で道学を講じないと彼を色眼鏡で見るかのごとくした。―

「子成雖人口紛紜当世之奇才也」

―子成は、人の口にはとやかく噂されるが、当世の奇才です。―

このことは、福岡において頼山陽が好ましくない人物として噂され冷遇されたことを暗に示しているが、それに対して昭陽は、一般には迎合せず、「奇才」と評価している。

では、彼らふたりにとってこの出会いはどのような意味を持っていたのだろうか。

まず、求めて訪れた頼山陽にとっては前節冒頭に掲げた詩からも明らかなように、楽しみと期待に溢れたものであった。『山陽詩鈔巻之三』(18)によれば、「同元鳳登高望海中道」の詩のように、昭陽（元鳳）と今日の福岡市西公園を偲ばせる高台から海の中道が延々と続く様を詩って風景を楽しみ、また亀井昭陽、松永子登とはもちろん、「五月十四日飲于上村太壽宅」のように滞在中はしばしば友人と酒を酌み交わしたことを記すが、これに対して状況を知る亀井昭陽は、やや複雑な気持である。

二人の出会いの微妙なずれは、彼ら個人間においても幾つかの点が指摘される。まず最も直接的には、両者ともに執筆中の史書、昭陽の『蒙史』と、山陽の『日本外史』との相互の評価の相違である。

市嶋謙吉『随筆頼山陽』では、両者の出会いについて、昭陽が山陽の『日本外史』に対して自分にも『蒙史』があると、意気込んで示したのだが、山陽はそれは苦心の作ではあろうが世に伝わるまいと述べたとされ、さらに、山陽の「新体の史家」と昭陽の「古典的の史家」とは合わないのも当然であると記されている(19)。結局その通りに山陽の方がベストセラーとなり、昭陽の方はわずかに専門家によって写本として伝わったにすぎない。

また出会いについては、『昭陽先生文集初編』の巻九に、「與頼子成書」と題される文が所収されているが、それには次のように記されている(20)。

「敝著蒙史上篇擬尚書謀面皮相則其迂闊不近人情甚於大玄。非千歳子雲又誰顧眄此。僕所明自財也。僕知足下亦有覆瓿之笑故先呈妄作狂詩露鄙心有形丗耳。豈敢驚於竜門自為史林罪人乎。形丗大有説煩故不贅。非敢好奇也。尚古且嚴國容也。然蒙史忌文有雷同而困于尚書。」（句点は筆者。）

―私の著作『蒙史』の上篇は『尚書（書経）』に擬しておりますが、面の皮が厚くあつかましいことですが、まわりくどく人々の気持から離れているのは、あの揚子雲が『易経』に擬して著した『大玄』より甚だしいのです。千年昔の子雲でもなければ、一体誰が私の本に注目してくれるでしょうか。けれどもこれは僕が明らかに自分で計画したことなのです。僕はあなたもまた、心に隠した含み笑いを持っていることを知っています。そこでまず妄作狂詩をお見せし、私の鄙しい心を世間にお見せした訳なのです。どうしてあえて竜門（司馬遷）に対抗して奢り偉ぶって、自ら歴史界の罪人になるでしょうか。世間に認められるのには大いにその訳があるのでしょうが、

煩わしいので無駄は申しません。敢て奇を好むという訳でもありません。いにしえを尊ぶということは、まさに国の在り方を確固とすることです。従って、『蒙史』は、その文に雷同があることを嫌うのですが、しかし、『尚書（書経）』に擬して苦しんでいるのです。―

この手紙を推察すれば、亀井昭陽にとって自らの『蒙史』を評価してほしかったのに、頼山陽はそうしなかったという不満が残っているといえる。そして、そのような評価は頼山陽だけにあったのではなく、世間一般の評価でもあった。実際に紐解けば明らかなように、古典的な形式を踏襲し、漢文で整然と記された『蒙史』は、難解であり、当時の一般人には理解出来なかったことが想像される。

同様なことは、昭陽と弟子玉裕甫との間の書簡類等をまとめた『亀玉問答』にも記されている。

「往年頼襄西游主博多松永氏屡訪高舘。先生乃擧二書示之。襄於蒙史不措一賛。鳴於日記賞嘆不己。渠亦以外史自居。其意所在可知耳。」（句点は筆者。）

―先に頼襄（山陽）が西遊し博多の松永氏（子登）宅に泊まってしばしば昭陽先生宅を訪問しました。昭陽先生は頼山陽に『蒙史』と『烽山日記』の二書を示されました。頼山陽は『蒙史』について一賛をも与えなかった。しかしああ、『烽山日記』には賞嘆が止まらなかった。彼は『日本外史』に自信を持っていたのです。その気持ちがよく判りますね。―

これは、昭陽の弟子だけに山陽に対してやや手厳しいが、その場の状況と、両者の相違をまた右と同様に示している。

さて、両者の出会いの状況において次に挙げられるのが、双方の境遇の相違である。亀井昭陽が文化七年（一八〇九）八月から文化八年（一八一〇）一一月まで烽火番役を勤めた経験をもとに文政四年（一八二一）には書き上げたとされる『烽山日記』「巻中　石峰第五」章には、頼山陽を回顧しつつ、次のように記している(21)。

「在先山陽ノ才子頼子成投二手牘一道。元鳳好二礼楽詩書一。腹蓄二十萬ノ水犀一。却與二戍卒一伍那。這ハ纔ニ才子ノ話頭。説起シ来レバ。也是不二止頼氏之子一。海内幾個ノ綈袍。没二一個不一レ發二驚這烽火之戍一。都説做二災過臨一レ身。」（句読点返り点は全集所載・亀陽文庫所蔵本による。）

―先に山陽の才子、頼子成（山陽）が手紙をよこして述べるところでは、元鳳（昭陽）は礼楽や詩書を好み、その内には十万の水犀と言えるような珍しく貴重で豊富な知識さえ蓄えている。ところがそれにもかかわらず警備の兵などと一緒にいるではないかと。これはただ単に才子頼子成の言い分であるが、その点から言えば、これはひとり頼子成のみならず、国内のどのような知り合いも、一人たりとも、自分が烽火の警護をしているのを驚かないものはいないし、すべての状況を考えて、災難が自分の身にふりかかったと説明するのである。―

ここでは、頼山陽の厚情が見えるとともに、昭陽自身が自らの置かれた立場をいかに不遇であると捉えていたかが理解される。そしてこのような昭陽に対して、頼山陽は前節で述べたように、脱藩者としてとかくの汚名はあるとしても、文才を評価され自由人として生き始めていた。この二人の境遇の相違はその出会いにも微妙な影を落とすことになる。

ところで、前節の考察によれば、文政元年（一八一八）のこの福岡での出会い以降、両者の境遇の差は一層際立っていくのである。

それは、もはや両者の個人的理由を超え、時代、そして、それをも包みこんだ存在そのものでもある「場所」の問題であるように思われる。その手掛かりを、右の考察からも浮かび上がってきた両者の史書についての比較に得る。

両者の史書の流布に関しては、頼山陽の『日本外史』が圧倒的に優勢であった。例えば後に明治一〇年から明治一五年にかけて出板された田口卯吉『日本開花小史』では、「眞に山陽外史の著書の如きは、海内の人心を鼓舞せし事古來無雙と云ふべきなり。著書を以て人心を鼓舞するを得る、此の如きに至りしは蓋し又時世の隆んなるに因らずんばあらず。」(22)と、それがいかによく読まれたかを述べると共に、時勢に適合したことをも述べている。また、『随筆頼山陽』によると光吉元次郎研究業績を引用して校刻日本外史（川越版）の初版が弘化元年（一八四四）に刊行、一四版が明治三二年（一八九九）に刊行されているとし、また、この川越版は版権など無かった為、いわば松平家が頼家に無断で発行し、嘉永元年（一八四八）に頼家版大字日本外史が刊行されたにもかかわらず巨利を博していたが、その後版権法が出来、頼家の訴訟に応じて当時の額で三万円という高額で、川越版の版権を譲ったとされている(23)。『日本外史』がいかに売れたかということが解る。

これに対して『蒙史』は、生前の刊行さえされなかったが、学問の風格という点からは、明らかに『蒙史』の方が優れている。このことは、右に述べた亀井昭陽自身の抱負や『亀玉問答』の記述の通りであるし、古典をふまえた学問が確固たる国の礎になるというのも真実である。しかしやはり読み物として面白いのは、明らかに『日本外史』である。この対比は、世間への流布という点だけで言えば、今日の学術書と文芸書との売れ行きの差と類比的に考えることも出来る。

しかし、問題はそれに収まらない。それは右にも述べてきたように、亀井昭陽に対する福岡藩の冷遇の問題である。世間に売れない学問だからこそ、為政者にとって必要なものは、政治的に庇護するものである。古来、学問の世界はそのようにして発展してきた。両者の出会いは、確かに和やかに紳士的に行われ、頼山陽の磊落さはその場を十分楽しく保ちえたし友情も深められたのではあるが、頼山陽が広く世に入れられることを予感し、自らの『日本外史』に自信を持っていたとしても、もし、亀井昭陽が藩に重視されていたら、出会いはもっと平穏に充実し、一層親密に行われたに違いない。そして、このことを「場所」の問題として考える時、彼ら個々人の背後に迫っている大きな「場所」の状況に左右されていたことが推測されるのである。それは当時の福岡藩の置かれている状況でもあり、その背後の、日本や世界の時代的状況でもあり、また、古来からの福岡という地理的歴史的場所の問題でもある。それら諸状況の場所論的考察については、後篇に委ねたい。

註

(1)『西田幾多郎全集　第四巻』岩波書店、一九四九／一九八八、二〇八－二八九頁。

(2)頼襄子成『山陽詩鈔　巻之三』後藤機校、荒木蔵。

(3)九州大学蔵。

(4)高野江鼎湖『儒侠亀井南冥』共文社、大正二年、七五頁。　荒木見悟『叢書日本の思想家　亀井南冥・亀井昭陽』明徳出版社、昭和六三年、七九頁。　町田三郎「亀井南冥・昭陽の生涯」『福岡県史　通史篇　福岡藩　文化（上）』西日本文化協会、平成五年、二五一－二

五二頁。など。

(5) 廣渡正利「西学甘棠館の廃校」『福岡県史　通史篇　福岡藩　文化(上)』西日本文化協会、平成五年、四四一－四四二頁。

(6) 八木清治「十八世紀後半における旅と情報ネットワーク　－橘春暉・亀井南冥・高山彦九郎の交流をめぐって－」『福岡女学院大学紀要　第三号』、一九九三、一九三頁。

(7) 『修猷館二百年史』同編集委員会編、昭和六〇年、二八－二九頁。

(8) 井上忠「亀井南冥と竹田定良　－藩校成立前後における－」『福岡県史　近世研究篇　福岡藩（四）』西日本文化協会、三五－四二頁。

(9) 註（4）と同書、一二〇頁。

(10) 註（4）と同書、一二一－一二二頁。

(11) 廣瀬淡窓『懐舊樓筆記』巻一五、『増補　淡窓全集　上巻』日田郡教育会／思文閣、大正一四年／昭和四六年、一九〇－一九一頁。

(12) 安藤英男『頼山陽傳』近藤出版社、昭和五七年、五一－六三頁。

(13) 註（12）と同書、八二頁。

(14) 中村真一郎『頼山陽とその時代　中巻』中公文庫、昭和五一年、七九頁以降。

(15) 註（12）と同書、六六－六七頁。

(16) 註（14）と同書、一五四－一五五頁。

(17) 『昭陽先生文集初篇』巻一、日田廣瀬本家蔵、『亀井南冥昭陽全集　第八巻下』、葦書房、昭和五五年、二五六－二五七頁。

(18) 『山陽詩鈔　巻之三』後藤機校、荒木蔵。

(19) 市嶋謙吉『随筆頼山陽』、中央公論社、昭和一七年、二四六頁。

(20) 『昭陽先生文集初編』巻九、日田廣瀬本家蔵、『亀井南冥昭陽全集　第八巻下』、葦書房、昭和五五年、三四五－三四八頁。

(21) 亀井昭陽『烽山日記』、亀陽文庫蔵、『亀井南冥昭陽全集　第七巻』、葦書房、昭和五四年、三七頁。

(22) 田口卯吉『日本開化小史』岩波文庫、一九三四／一九九二、二〇〇頁。

(23) 註（19）と同書、九八－九九頁。

（あらき　まさみ　福岡女学院大学助教授）

－バックナンバー紹介－

『地域文化研究』第八号

〈第八回大会報告〉

長門北浦の地域文化史

北浦地区の考古学的調査成果にたつ発表によせて　國分直一

長門北浦の古代文化－地理区分にみる歴史像－　木下尚子

綾羅木平野の土地開発－先史時代から現代まで－　水島稔夫

〈須佐採訪〉

須佐町採訪によせて　宮田尚

山口県阿武郡須佐町社会の場所・家・人の呼称　岡野信子

阿武郡のたたら製鉄について－須佐町のフィールドワークによせて－　渡辺一雄

須佐踏査見学記－文化財ガイドをかねて－　佐藤睦子

明治神宮体育大会と船競漕　安冨俊雄

周防の木地屋・二題　金谷匡人

長門国鬼ケ城伝説の研究　井上孝夫

楊貴妃の墓　伊藤彰

五島列島の盲僧　高見寛孝

焼き殺される山の神－阿蘇の事例報告－　村崎真智子

〈食べもの風土記〉納豆　山田金次郎

祭礼競技探訪ノート－5　安冨俊雄

山口県市町村における景観行政の評価と方向性　熊木村野武馬稔

福祉の里づくり－杷木町と矢部村に見る試み　田鍋秀則